

ケニアで学んだ「マイノリティ支援」と「多文化多民族共生」の今

研修期間 2025年9月10日～9月21日
渡航先 ケニア（ナイロビ）

医学部健康総合科学科 公共健康科学専修4年 関谷彈

なぜケニアを選んだのか

人々、アフリカ・ラテンアメリカなど新興国が抱える社会課題、特に少数民族・孤児・障害児やその家族などの「マイノリティ」に対する社会的・地域的サポートの実態に強い興味があった。リサーチを続ける中で、来日中の早川千晶さん（キベラスラムの中の学校、マゴソスクール主宰）主催の座談会（愛知県で開催）を発見し、参加できた。そこで、ナイロビという都市の中に存在するマイノリティ＝スラムの人々の暮らしに関する早川さんの経験談を聞いたことで更に学習意欲が増し、渡航先として選択するに至った。

企画プロセス

研修テーマを「マイノリティの持つ価値観や課題を、当事者・支援者の経験・価値観を通じて学ぶこと」に決定、マサイ族・キベラスラム・障がい児を研修の軸に設定し、研修を企画した。

研修の軸と関連する組織から、テーマに合致し「現地の声」に直接触れる機会が特に期待された6箇所を候補として選定した。

先生方のサポートを受けながら先方と連絡を取り合い、最終的に3箇所より受け入れ可能という返事をいただき訪問した。

スケジュール(予定)

9月10日 成田空港発→仁川・アディスアベバ経由
9月11日 ジョモケニヤッタ空港（ケニア・ナイロビ）着
9月12日 シロアムの園訪問
9月13日～9月16日 マサイフィールドワーク※
※旅行者下痢症による体調悪化で実施を断念。
→代わりに、外国人患者の立場でケニアの医療サービスを体験できた
9月17日～9月18日 キベラスラムフィールドワーク
9月19日 ツアー参加者にインタビュー
9月20日 ナイロビ発→アディスアベバ・仁川経由
9月21日 成田空港着

面談者紹介

公文和子さん

→クリスチャンの小児科医。北大医学部卒業後、2000年にリバプールへ留学し熱帯小児医学を学んだ。その後、東ティモール、シェラレオネ、カンボジアでの医療活動を経て、2002年よりケニアで活動開始。2015年に、ナイロビ郊外にシロアムの園を設立し代表を務めている。シロアムの園では、障がい児やきょうだい児、家族らに対して、療育、ケア、社会・経済的自立支援、地域社会への理解促進など包括的支援を行っており、2022年に現在の土地へ移転した。

永松真紀さん

→大学卒業後から添乗員として世界中を駆け回り、1996年からケニアへ本格的に移住し、ツアーガイドや撮影コーディネーター等の仕事を手がけた。マタトウのオーナーやケニア人男性との結婚・離婚を経て2005年マサイの第二夫人となる。以後、コミュニティ奨励、マサイ族の文化・生活の普及などの諸活動を国内外で精力的に展開。

ジャクソン・オレナレイヨ・セイヨさん

→シリア・マサイのカプティエイ支族に属する、戦士時代に7頭のライオンと1頭の象を仕留めたという勇敢なマサイ族。現在、牧畜を基盤とする伝統的生活を送りつつ、時代の流れに翻弄されずより良い世界を築けるよう、長老としてコミュニティを牽引している。

早川千晶さん

→世界放浪の旅を経て1990年よりナイロビに定住、1999年にはキベラスラムで貧困家庭や孤児のための学校マゴソスクールを設立した。マゴソスクールでは子どもだけでなく職員などが常時居住しており、食糧支援、卒業生支援、収益事業、医療支援を行いつつ、講演会や「マゴソスクールを支える会」により日本で支援の輪を広げている。



訪問場所での学び

公文和子さん・シロアムの園

高い医療費、蔓延する偏見から、障害児福祉の課題は山積状態。
→本人、兄弟、両親への蔑視、両親間や家族間での衝突も発生
⇒本人だけでなく、家族全体・地域全体への包括的支援を実施。
子供や家族のエンパワーメントを引き出し、社会の一員としてそ
のの人らしさを最大限發揮して、社会経済的自立を目指していた。



永松真紀さんと、ナイロビ最終日に本当に色々お世話になりました！

永松真紀さん・ジャクソンさん

マサイ族は非常に有名な民族だが、実際は少数民族。
→性別や年齢により明確に役割の違いがあるのが特徴。
→主食は牛乳（現在ではウガリなど穀物も食べている）
⇒激動の時代の中で、「牛と共に生きる牧畜民族」としてアイデンティティーを保ちながら懸命に生きていた。



マゴソスクールのダン校長と偶然僕と名前が一緒でした（笑）子供達も喜んで写真を撮ってくれた。

早川千晶さん・マゴソスクール

皇居外苑ほどの面積に200万人以上が住むキベラスラム
→拠り所を求めたり、将来のビジョンを持てなかつたりでギャングに身を委ねる若者が多いのもまた現状。
⇒マゴソでは、家族や子ども同士のつながりを重視し、困難な中で懸命に生きる子供達に希望を与えていた。



アスカリのTimothyと診察中、会計や問診を手伝ってくれた。

The Nairobi Women's Hospital Hurtingham

深夜1時にアスカリ（ガードマン）と共に救急外来を受診。
→手技は丁寧だったが救急だから待ち時間が長かった。
⇒赤痢アメーバと診断され点滴を打ち、抗菌薬処方。
→帰国後、日本の病院では旅行者下痢症と診断された…
総じて医療水準は低くないが、検査精度には課題あり。



ホテルの周りの道↑朝夕は交通量が多いが、写真（星）ではそこまで

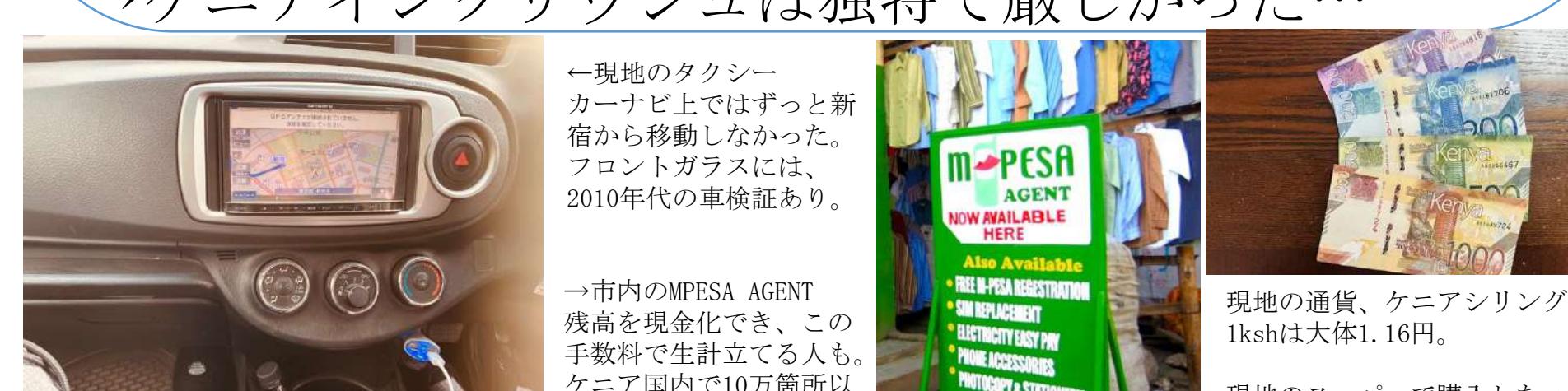
街中でのフィールドワーク

・ナイロビ市街地では未舗装の歩道が多く、信号や横断歩道、ガードレールの設置も少なかった。
→露店が軒を連ね、水、果物、マンダジなどを販売。

・ケニアではMPESA（電子マネー）が普及している。
→銀行口座なしで契約でき、地方や貧困層にも普及。
⇒GDPの半分以上を占める主要金融インフラに発展！

・タクシーの多くは、日本の中古車。（TOYOTAとか）
→GPS機能がなく、運転手はスマホでナビ確認。

・ケニアの公用語は英語とスワヒリ語。
→ケニアイングリッシュは独特で厳しかった…



現地のタクシー カーナビ上ではずっと新宿か移動しなかった。フロントガラスには、2010年代の車検証あり。

市内のMPESA AGENT 残高を現金化でき、この手数料で生計立ての人も。ケニア国内で10万箇所以上設置されていた。



現地の通貨、ケニアシリング↑1kshは大体1.16円。



現地のスーパーで購入した→これで合計1200ksh(約1400円)

感想・反省

42もの民族が共存するケニアで、民族としての伝統を尊重しながら激動の現代社会を生き抜く人々のタフネスを存分に味わうことができた。ナイロビで見た、空・大地・人々の美しさを生涯忘ることはないだろう。また、現地での体調不良によるスケジュール変更は残念ではあったが、身をもって現地の医療を経験したことはむしろ貴重な経験で、もう一度ケニアに行く理由ができたと前向きに捉えている。今回の経験を教訓に、次海外に行くときは、必ずOSIと味噌汁を持参することを心に決めた。

後輩へのメッセージ

海外研修は、自分で企画やアポ取りを行い計画的に準備を進めていく必要があり、確かに大変でした。ただ、現地で体験したケニアの美しさ、人々の勇敢さ・逞しさ、言葉では言い尽くせないほど素晴らしいです。これはこの研修だからこそ得られた、最高の宝です。そして、これは決して自分一人では味わえなかつた、先生方をはじめ多くの人のサポートがあつて経験できたものです。お世話になった全ての方々、特に真紀さん、千晶さん、本当にありがとうございました！後輩の皆さんもぜひ海外研修に挑戦してください！応援しています！